



知っておきたい アレルギーの話

NPO法人アレルギーを考える母の会
代表 園部まり子



イラスト／清水直子

第13回

失わなくてもよい命

トイレの中で

息絶えていた高校生

失わなくてもよい命が失われることほどつらいことはありません。しかし喘息では、時としてそんな悲しいことが起こります。

ある高校生の男の子が夜になっても帰宅しませんでした。親の連絡を受けて学校内を探したものの見つからず、その夜、とうとう高校生は帰宅しませんでした。そして翌日、学校のトイレの中で、発作止めの吸入薬をくわえたまま亡くなっているのが見つかったのです。

この子は喘息でした。大発作で亡くなったのか、発作止めの気管支拡張薬の使いすぎで亡くなったのかはわかりません。ただ残念だったの

は、その子は小さな時から喘息で周りの友だちにかからがわれていた。そのため高校に入ってから自分喘息であることを学校にも友だちにも言えず、薬も皆からわからないように隠れて使っていました。もし周囲に「苦しい」と訴えることができ、誰に遠慮することもなく適切に薬を使っていれば、恐らくその高校生は命を失わずにすんだでしょう。

この悲しい出来事を通して、私は3つのことが大切だと痛感しています。1つは、喘息は必ずしも重症な人が亡くなるわけではないことを多くの人に知ってほしいと思います。専門医の指摘では、軽症と判断されていた人が亡くなるケースや、思春期では病院以外で亡くなるケースがあり、その要因として「これく



そのべ・まりこ●神奈川県社会福祉協議会セルフヘルプ支援事業運営委員。困っている患者と専門医との橋渡しを第一に「治療ガイドライン」情報などの提供、専門医による講演会や会報発行、行政への働きかけを行なっている。共著に『食物アレルギーの手びき 改訂第2版』（南江堂刊）。

らい慣れているから大丈夫」と思って受診が遅れたり、発作止めの気管支拡張薬を使いすぎることなどが挙げられています。

「みんなで支えよう」という健康教育を

もう1つは、病気であることを隠さなくてもいいように、「困っている仲間をみんなで支えよう」という気持ち育てる教育を行なってほしいと思います。既にそうした「健康教育」に取り組んでいる学校もあり、「喘息で苦しんでいる人に対して何ができるか」という共感や支援の輪が広がっています。そして最後に、何より発作を起こさないようにする日頃の治療が大事であることを、改めて知る必要があると思います。